

ペスタロッチーの直観論

長 田 新

此篇は大正十五年十一月六日京都市哲學會大會に於て、私の試みた講演の一部を發展改訂したものである。ペスタロッチーに於ける「合自然性」の原理を明かにするのを主なる目的とした私の講演にあつて、直観論は此原理の發展が舍々遭遇した言はず二次的の論であつた。今その講演から直観論のみを引き離すに方つて、私は一面新たな材料を補ふ必要に迫られ、他面その論述の過程にも可なり度合に於ける改訂の必要を感じた。雜誌「哲學研究」に寄せるに方つて、一と云此篇の性質に就て述べたのである。

一

直観の原理はペスタロッチーが教育思想の全體系に最も重要な位置を占めるものゝ一つであり、且つ彼れが人類教育の歴史に於ける存在の意味さへ、此直観の原理に依るところが少なくない。近世教育の進歩の跡を辿つて、直観の原理が如何に大なる役割を演じたかを見逃がすものは無いであらう。さうして直観の原理をして近世教育の進歩にその大なる役割を演じさせた代表者として、我々は先づコメニウスとペスタロッチーとを數へなくてはならない。然るにひとしく直観の原理を説

きつゝ、コメニウスのそれとペスタロッチーのそれとが著しく趣を異にするとは、多くの學徒の述べるところである。今ナトルプの言ふところを聞けば、コメニウスは元來人間を以て自然の「傍觀者」若しくは自然の「通譯」と見たるが故に、彼は自然界に於て知らるべきものを一々蒐集陳列して、例へば「世界圖畫」[his pictis]のやうな一種博物書風のものゝ編輯に忙しかつた。然るにペスタロッチーは我々に於ける主觀の構成力に重きを置いた爲め、その直觀論も亦コメニウスに見る模寫說風のものとは類を異にすると言つてをる。ナトルプが言ふやうに、果してコメニウスが我々人間を自然の單なる傍觀者若しくは通譯と見て、直觀論を立てたかどうかに就ては、今は論ずる邊がない。たゞペスタロッチーの直觀論が、彼れに先だつ多くの學徒のそれと異なる獨自の趣あるは拒み難い。ペスタロッチーが直觀の原理は著しく內的な從て理想的な自我に深い根柢を有つやうである。ペスタロッチー學者として誰れもが許すナトルプは屢々ペスタロッチーの直觀をカント哲學の光に依て照さうとするのであるが、我々は後に説くであらうやうに、カントより寧ろ凡てを純粹自我の發展するところとする彼のフィヒテの理想主義に依て、よりよくペスタロッチーの直觀を照らすことが出来るであらう。カントにありて大凡受働的に見らるゝ直觀

も、ペスタロッチーにありては、著しく能働的であり、内的自我の構成である。こゝにペスタロッチーが直観論の特色もあれば、従つてまたその直観論から導かれる種々なる彼が教育説の特色もある。それにも拘はらず彼が直観は、教育史上久しくたゞ單なる感性的な自然的なものと解されて來た。斯く解さるゝにも、併かし、全く理由がないではない。蓋しペスタロッチーは實に甚だ屢々、若しくはおきまりのやうに、その直観論に於て、直観に於ける感性を反覆力説してをる。彼は自己の思想を公けにするに方つて、具體的に相手を豫想するのが常である。人民に與へるとか、識者に與へるとか、或は母に與へるとかいふ形を取るのが彼の著作である。教育の實際に携はるものを主なる對象とする直観論の叙述にあつては、直観そのものが據つて立つ理を力説するより、寧ろ直観に於ける自然的な感性的な過程の詳細な描寫を必要としたのであらう。けれど直観そのものゝ概念の全體的な理解が、俄かに斯かる點から決すべきでないのは言ふまでもない。

二

直観といふ言葉は、他の多くの學術語がさうであるやうに、矢張り、種々なる意味に使はれてをる。普通直観と言へば、其文字も示してをるやうに、直接に心が物を觀る

といふことである。思惟に依て間接に物を捕へるのではなく、直接心に物を映すことである。たゞその觀られるところの、若しくは映されるところの對象は、外的な自然的なものであることもあれば、また全く内的な精神的なものであることもある。神を直觀するなどは後の場合であらう。教育學の歴史に於ては、併かし、直觀は感覺機關を通して外物に關する具體的な知識を得るといふ、比較的限られた意味に使はれて來た。中世の教育が多くは言語又は文字といふ符合に依つたに對して、言語や文字のやうな符合に依ては、なく、符合が代表する實物そのものに依て教育しようとしたのが、十六世紀以後に興り來つた直觀主義の運動である。ゾントが直觀とは實物に關する表象である」と言つたのは、教育史上に於ける直觀の概念によく當る。故に直觀教授は「實物教授節ち」[Object lesson]なども言はれてをる。ひとしく直接に對象を觀るのではあるが、思惟に依らないといふ意味の直接と、言語や文字のやうな符合に依らないといふ意味の直接とは、同じであるとは言ふを得ない。ひとり直觀の方法に斯かる相違があるだけではなく、直觀の對象に於ても普通は廣く自然の外精神をも含むのに、教育史上に於ける直觀は自然的な外物にその對象を限るが常である。直觀はまた一般に、消極的な若しくは受動的の概念とされてをる。凡そ思

惟が詮するところ、自己の思惟である以上、その思惟の作爲を加へないといふのは、靜的に見るといふことでなくてはならない。受容性は斯くして直觀に重要な一つの持前とされた。コメニウスに發した十六世紀以來の直觀敎授は主として斯かる立場に立つて居た。然るに直觀を以て凡ての認識の絶對的基礎とし、此基礎の上に全敎育を築かうとしたペスタロツチは——敎育活動とは畢竟認識の基礎を確立する作用に外ならないのであるが——直觀を單に靜的な受容的なものと見ず、寧ろ動的な自發的なものと見、從て又價値の自己生産者としての自我の構成作用と見た。勿論彼は直觀の受容性を無視したのではなく、自發なくんば受容なしとして、受容と自發とを統一しようとしたのである。直觀が受容的であり、思惟が自發的であるとすれば、彼は直觀概念の内化と深化とに依て、歴史に於ける直觀と思惟との二元的對立を破却したものと云つてもよい。彼は人も知るやうに、全我の統一活動としての勞作を直觀的認識構成の一大原理と見たばかりではなく、彼がその直觀と自己活動との統一觀は彼をして、自ら謂ふ「生活が陶冶する Das Leben bildet」といふ境地をさへ開拓させた。

三

「ゲルトルードは如何にして其子を教ゆるか」の第九信を開けば、ペスタロッチーは先づ次のやうに述べてをる。「友よ！今私が自から願みて、さうして人間の教授の本質に對して眞に私が何をしたかと自分に尋ねて見ると、私は氣付くのである。私は直觀を以て凡ての認識の絶對の基礎と認めることに於て、教授の最も高き最も優れた原理を確立し、且つ凡ての個々の教授を離れて、教授そのものゝ本質とさうして自然そのものに依て我々人類の教化を規定しなくてはならない原本的形式を發見しようとした⁽²⁾。我々はペスタロッチー自らが洩らす此僅かの文字のうちに早くも、直觀が彼れの全教育思想に於て占めねばならない位置とさうしてその直觀が據て立つ立場の方向をさへ豫感することが出来る。ペスタロッチーがその得意とする「直覺の生き生きさ」を以て捕へ居た教育思想は、スタンツやブルグドルフの教育事業に依て、裏書きもされ、ば發展もされた。この裏書きされ、發展された彼れの思想の叙述こそ、彼自らも言つてをるやうに「ゲルトルードは如何にして其子を教ゆるか」⁽³⁾ (Gertrud ihre Kinder lehrt) といふ著作である。その著作に於て、自ら願みて、教授の本質に對して眞に成すありし所以のものは、直觀を以て凡ての認識の絶對の基礎 *absolut* *Fundament aller Erkennnis* と認めたところにあるとしたのである。直觀は上の引用に

も讀まれるやうに、「教授の最も高き最も優れた原理」であり、「凡ての個々の教授を離れた教授そのものゝ本質」であり、「人類の教化を決定しなくてはならない原本的形式 [Urform]」である。彼は「方法 Die Methode」をいふ著作の中にも、直観は「人間の認識の唯一つの基礎であり」「教授の本來の眞實の基礎であり」「余が出發する本質的の立場」であると言つてをる。^(四)

直観を以て凡ての認識の唯一絶對の基礎と認めるとは、ヘスタロッチーが種々なる機會に繰返すところであるが、直観が認識に對する役割を斯くも高價に見積るところは、認識論の全歴史に於ても或ひはその類を多く見ざるところではなからうか、ひとり狹義の認識に於てばかりではない、道德宗教の陶冶に於ても、彼が直観に待つところは、決して少なくない。彼の言ふところに依れば、既に起つてをるところの、さうしてなほ將に來るであらうところの市民的道德的及び宗教的の沈淪を防ぐ手段は、……直観が凡ての認識の絶對の基礎であるといふこと、言葉を換へるなら、各の認識は直観から出發して、さうしてまた直観に導き還されなくてはならないといふことを認める以外の手段の能くするところではない。^(五) 彼が直観に待つところの如何に大なるかは察するに難くない。さうしてその待つところの大なるは、聽て彼が直

觀そのものに、深い根柢を認めてをるといふことでもなくてはならない。直觀は古來多くの學者に依て概念と對立するものと見られ、概念が自發的なら直觀は受納的であると言された。又直觀と概念との關係は感性と悟性とのそれともされた。直觀が若し單なる感性的な受納的なものであるならば、果して直觀を以て凡ての認識の唯一絶對の基礎とし、依て道德宗教の陶冶さへも保證することが出来るであらうか。凡そ「基礎」とは時間の上の單なる初めでもなければ、又生命なき單なる材料でもない。基礎をなすものは、普通時間の上では初めに來るかも知れない。けれども初めに來るから基礎であるのではなく、基礎であるから初めに來ると言ふべきである。基礎とはそれから凡てが發展して行く生命、若しくは可能性としての生命でなくてはならない。「各の認識は直觀から出發して、さうしてまた直觀に導き還されなくてはならない」と言ふのは、直觀は全認識過程に遍ねく行き渡つてをるといふことである。直觀が斯く全認識過程に遍ねく行き渡ることの出来るのは、直觀が全認識の基礎であり、全認識を發展することの出来る可能性であるからである。直觀を以て認識構成の單なる材料を見るものは古來少なくともないが、ペスタロッチーにあつては、直觀は單なる材料ではない。材料は常に死物である。死物としての材料が「絶對の基礎」又

は唯一つの基礎となつて、凡ての認識を發展するといふが如きは考へ得べきことではない。直観を以て材料と見ず、實に基礎と見るところに、ペスタロッチーが認識論のおもむきはあると言ふべきであらう。

然らば凡ての認識の基礎としてのペスタロッチーの直観は、感性的なものか、それとも悟性的なものか。我々は答へてその何れでもなくて、同時に其等の兩者である、と答へるであらう。ペスタロッチーの直観が感性的なものでもなく、悟性的なものでもなくて、同時に其等の兩者であることを明かにする爲めには、我々は勢彼れが認識論一般に所説を觸れなくてはならない。ペスタロッチーにありては、認識的存在としての人間は、道德的存在としての人間と同様に、「感覺精神的」若しくは「精神感覺的」がその本質である。感覺的ではあるが、併し單なる感覺的でなく、精神的ではあるが、併し單なる精神的でなく、唯一つの「感覺精神的」若しくは「精神感覺的」なるところに、彼は状態 Zustand としては、はなくて過程 Vorgang として、存在 Sein としては、はなく流轉 Werden —— 永劫の流轉 ewige Werden —— として、Gabe としては、はなく Aufgabe として道德的存在としての人間を觀た。認識的存在としての人間が道德的存在としての人間の外にもう一人あるといふことのあり得ない以上、それも亦結局唯一の「感覺

精神的「若しくは」精神感覺的」といふ二重性 Doppelwesen でなくてはならない。二重性としての認識的存在にあつて、感性及精神の二契機が認識に占める作用又は價值如何を問題とするとき、感性は受働的であり精神は能働的である。「ゲルトロッドは如何にして其子を教ゆるか」の第四信に於てペスタロッチーは言つてをる。汝は自然的生命存在そのものとしては汝の五官に外ならない……此五官は鏡にも譬ふべきもので、其處には渾沌なる種々雑多な印象の海が映る。「斯かる感性的な一面に對して、自ら法則を興へるものとしての自律的な精神がなくてはならない。感性は自ら眞の認識を構成することが出来ない。認識構成の基礎は自己活動的な精神のうちにある。たゞ必ずしも認識内容が認識精神の純粹生産であるといふのでもなければ、又必ずしも意識の各の事實が認識精神に還元されるといふのでもない。具體的には意識の出來事は時間の中に流れ、且つ「感覺精神的」な人間に依て運ばれる。ペスタロッチーの直観は感覺精神的な人間に依て時間の中に具體化された認識に外ならない。今此邊の消息を最もよく傳へるものとして、我々は「ゲルトロッドは如何にして其子を教ゆるか」の第十、第十一の二信にペスタロッチーが説くところを聞かなくてはならない。

第十信に彼は直觀を論じて言ふのである。「直觀は教授の出發點として考へられる限りに於ては、凡ての形式の關係を教ゆる直觀術と切り離されざるを得ない。……我々が若し直觀を直觀術と對立させて、個々別々に、さうしてそれだけ考へるならば、直觀は感覺機關の前に立つ單なる外部的對象及び其等の對象の印象の意識の單なる興奮に外ならない」直觀術(L)に依て發展されない直觀は、教授の出發點としての、從て單なる一面的の直觀であつて、全體としての直觀ではない。ペスタロツチの直觀は感覺機關の前に立つ單なる外部對象の印象ではない。カントの直觀は思惟と對立する單なる感性的な受働的なものと言はれてをる。カントの直觀が斯く解さるべきであるとするならば、ペスタロツチの直觀はカントのそれと趣を異にするものと言はなくてはならない。ペスタロツチ(L)にありては感性的は直觀の一面であつてその全相ではない、感性的であつて、「單なる感性的」でないのがペスタロツチの直觀である。故にペスタロツチはすゝんで説くのである。「自然はそれ(外物)を以て凡ての教授を始める。幼兒はそれを喜び、母親はそれを與へる。けれど術は此處では自然と同じ步調で何事をもしない。母が幼なきものに世界を示すその最も美しくしき光景も、無意味に幼きものゝ目の前にあるのみで、術は此光景に何物を

も結合して居ない⁽¹⁾。術に依て統一されて始めて所與が眞の直觀になると言ふのである。「アペンツェルの婦人が出發するその出發點に於て、私は私の教授を始めるべく一切をなした。私はなほ進むのである。私は最初の出發點に於ても、更に又認識手段の全過程に於ても、自然や境遇や母性愛が、幼なき時代から子供の感覺機關の前に齎らすものを放任しておくやうなことはない⁽²⁾」。術を以て單なる所與を統一するところに直觀を構成するといふのと同じ意である。故に又私は遇然的なものを除いて、凡ての直觀的認識そのもの、本質的なものを、既に其頃から子供の感覺機關に齎らすのである」とも言ふ。蓋しペスタロッチの旨とするところは直觀そのものを術に高め、さうして兒童をば形數及び語といふ認識の凡ての三つの基本的方面に於て、凡ての直觀の最も抱擁的な意識に導かうとする⁽³⁾。にあつたのである。言語の初歩教授を論じて、私は此の教授に於ても、内的直觀 *innere Anschauung* をして、音の勝手な記號を兒童の目の前に齎らす外的直觀に先立たしめる事をさへ可能ならしめた⁽⁴⁾。と言ひ居るところを見ては、彼れの直觀が單なる外的な感性的なものではなくて、内的な精神的なものでもあると主張せざるを得ない。直觀も分析すれば内外兩面を有す。さうして此の兩面が統一されて具體的全體としての直觀をなすのであ

る。然らば内外両面の關係は如何。直觀が單なる感覺的なものでもなく、單なる精神的なものでもなく、感覺精神的といふ二重性であり、「中間物 [Zwischenmedium]」であるとするならば、この二重性又は中間物に於ける感性と精神との關係は如何に解さるべきであるか。

四

「ゲルトルードは如何にして其子を教ゆるか」の第十信に於て、ペスタロッチーは直觀に於ける感性と精神との關係を説いて言ふのである。「既に幼兒の搖籃に於て、我々は人類教化のことを、盲目的な不眞面な自然の手から奪つて、幾千年の經驗が人類の永劫の理性の本質から抽象することを我々に教へたよりよき方の手に置き始めなくてはならない」。(註)^(註)彼の直觀は「盲目的な不眞面目な自然 [Blinden spielenden Natur]」の手にあるものではなくて、「よりよき方 [Bessern Kraft]」の手になくてはならない。彼は此點を力説して更らに次の意味を同じ第十信に述べてをる。「遇然のものど永劫のものとの統一こそ必要である。勿論遇然のものも永劫の不變のものどひとしく必要ではある。けれど遇然のものは人間の意志の自由に依て、人間性に於ける永劫のさうして不變のものど調和されなくてはならない。遇然のものが依存する自然は、こ

れを一面から見れば、盲目である。盲目なるが故に、此自然は見得る精神的な道德的な人間の自然と調和し得る自然と言ふを得ない。然るに自然的なものど自ら調和することが出来、さうして又調和しなくてはならないものは、獨り精神的な道德的な自然である。我々の感覺機關の法則は、我々の自然の本質的要求に依て、我々の道德的な精神的な生命の法則に従屬されなくてはならない。此従屬なしには、我々の本性の自然的な部分が、我々の教育の眞の最後の結果に影響することが出来ない。人は内的な精神的な生命に依てのみ人となる。人はそれに依て獨立と自由と満足を得る。單なる自然的な本性は、人を其處へは導かない。自然的な本性はその本質に於て盲目である。その途は暗黒と死の途である。それゆゑ人類の教育教化は、盲目的な感性的な自然の手と、さうしてその暗黒と死の影響とから取つて、我々の道德的精神的實在の手と、さうしてその神的な永劫の内的光明と眞理との中に置かれなくてはならない。

汝が不注意にも外的な盲目的な自然に放任しておく一切は沈淪する。このことは生あるものに眞であるやうに、生なきものにも眞である。不注意にも汝が大地を自然に放任するところには雜草と薊が生える。汝が人類の教育を自然に放任する

ところに於ては、自然は最善の教授に必要な途に於て、汝の理解力にも適せず、また汝が子供の理解力に適せず、自然は感覺機關の上の混亂せる印象以上に進まない。教授を「人間性と調和させ、さうして人類の發展に於ける自然の道行を教授そのものに接近させた」と自ら言ふペスタロッチーが、凡ての教授の「絶對の基礎」としての直觀を深く人類の内部精神に基づけようとする覺悟は上の引用に十分明かである。

「ゲルトルードは如何にして其子を教ゆるか」の第九、第十の二信に於て、漸く直觀の概念を發展し來つたペスタロッチーは、此書に於ける彼が直觀そのものゝ論の一段落とも見るを得る第十一信に至つて、筆を改めて言ふのである。「愛する友よ！私が前便に述べた結語は大切で、私は今日また大いに言はふとする。私が今迄考へ來つた教授の目標への指導は、併したゞ、感性的な自然の道行を私の目的に向つて純化する(註四)ことである」。彼にありて直觀は感性的な自然の道行を、凡そ教授が目的とすべきである明瞭な概念に純化することである。それは純化されたる感性的な自然の道行の高き完成であり、純粹の悟性の道行である(註五)。感性と悟性とを二元的に對立させ、此對立を越えよう爲めに、別に「想像力 *Einbildungskraft*」を持つて來るのをカントの立場であるとするならば、ペスタロッチーの立場はそれ自身二重性としての中間物なる

直觀を以て、感性と悟性とを統一するところにある。ペスタロッチの直觀は認識に於ける、言はゞ具體的普遍である。具體的ではあるが、併し單なる特殊である感性でもなく、普遍的であるが、併し單なる抽象に過ぎない悟性でもなくて、具體的であつて普遍の性質を内に有つところに、ペスタロッチは直觀の特色を見た。リードマンが後にも述べるやうに、ペスタロッチの直觀を解して「個物を通しての普遍 *Das Allgemeine durch Einzelnes*」としたのも此意味である。

中間的或物としての、若しくは認識に於ける具體的普遍としての直觀にも、その直觀的意識統一の深淺に従て、種々相のあるは勿論である。たゞ「人間の直觀に於ける凡ての動搖を、最も確かな真理に高めることは、余の自然のよくするところである。直觀そのものをその單なる感性の動搖から離して、さうしてそれを余の本性の最も高き力の作爲、即ち悟性の作用にすることは、余の自然の能くするところである」^(註)。二重性としての中間物なる直觀は、その最も單純なものにあつても、尙ほ且つ單なる感性の所産ではなく、低き程度に於ては、早くも「自己自身の作爲 *Werk meiner selbst*」でなくてはならない。たゞその低き程度に於ける自己自身の作爲としての直觀を高め、確かな真理に導き、「余が本質の最も高き力の作爲」にするは、我々の本

性の能くするところであると彼は言ふのである。教育活動の旨とすべきは、既に人類の本性が能くするところに従つて、直観を純化し、確かな真理に高めるにある。ペスタロッチーが「教授の術」直観の術「又は單に「術」と言ふがそれである。蓋し直観のうちには高き獨立の力が作用しなくてはならない。此力をして支配的ならしめようとするのが、直観の術 Anschauungskunst である。直観の術に依て、直観に於ける渾沌は一定の法則に服従されて、確かな真理に高められる。如何なる手段がこゝに應用さるべきかは、教授方法の問題に屬するから今は述べない。たゞ臚ろな直観的印象から自らを高め、凡ての動搖を除く手段は、結局思惟の力そのものうちにある。さうして術は此等の手段を利用する。此等の手段とはペスタロッチーが斷えず説く、彼の數形及び語の三種である。故に又彼は「粗野なるものゝ生き生きせる直観力を余が感性的機制に止めおかないことは、……高められたる術の能くするところである。」^(七)と言ひ、又「世界は纏れた直観の渦巻き流れる海として、我々の前に横はる。教授と術の事柄は、この直観のうちに横はる渾沌を止揚するにある。」^(八)と言ふ。彼は術を以て「感性的機制と純粹の悟性過程とを互に調和しようとした」のである。さうして術が斯く感性と悟性とを調和することの出来るのも、結局直観力に更らに余が理性の

力を附加することは、余が本性の能くするところである⁽⁴⁾からである。人間本來の自然に従ふ外に教育の道を求めぬベスタロッチーにあつては、直觀教授に於ても人類の本性に可能な道に従ふ外はないのである。

然らば余の本性は何故に直觀力に理性の力を附加して、直觀の道行を完了することが出来るであらうか。答へて、それは余が本性の本質的要求に依るといふの外はない。「我々の感覺機關の法則は、我々の本性の本質的要求に依て、我々の道徳的な精神的な生命の法則に従屬されなくてはならない」とは既に引いたベスタロッチーの言葉である。然らば更らに進んで、我々の本性は何故に感覺的なものと精神的なものとの結合をその「本質的的要求」とするのであらうか。これに答へる道は、ベスタロッチーが我々の本性を感覺的なものとも見ず、精神的なものとも見ず、唯一つの「感覺精神的なもの」と見てゐることに歸するの外はない。感覺的なものと精神的なものとの結合統一を要求するのは、我々の本性がたゞその本性に従ふといふことである。ベスタロッチーの全教育思想を支配する彼の「合自然性 [Naturgemäßheit] の原理とは、本來自己自身「感覺精神的」な唯一存在なるが故に、感覺的なものと精神的なるものとの結合統一を「本質的要求」とする我々人類の本性としての「自然」に従へといふ理を説いた

ものである。故に直観とは認識生活に於て我々が人類の本性に従ふ以外の何物でもない。直観は、感覺的でもなく精神的でもなく、感覺と精神との結合統一せる具體的渾一體であるといふ意味に於て、それは又「人間的」であるとも言ふことが出来る。

五

直観に就て以上述べ來つたところから推せば、ヘスタロツチーは彼に先立つ經驗論と合理論とを統一して、ひそかに獨自の一地步を、その直観論に於て築かうとしたかの觀がある。ヘスタロツチー以前の認識の哲學には、人も知るやうに、經驗論と合理論とが互に相容れ難き極端な對立を示して居た。カントの批判哲學が若し遍した經驗論と頑固な合理論とを調停和解するにあつたとすれば、ヘスタロツチーの立場も亦カントに近いと謂はなくてはならない。カントは一面認識の構成に於ける經驗にその位置を與へると同時に、他面精神そのものうちに認識の要素を認めたと。ヘスタロツチーはカントのやうに經驗若しくは感性にその十分の權利を與へつゝ、而かも本來の精神に於ける自己活動を重んじた。たゞヘスタロツチーにありては、その精神力は直観に於て、又直観を通してのみ、自己を構成することが出来るとした。認識は彼には直観に於ける、感性を通しての精神の自己構成である。さう

してその「數」と「形」がその構成作用の手段となるのは、恰もカントに於ける時間と空間の如きであるとは、多くの學徒の説くところである。ペスタロッチーがカントと全然別途に斯かる立場を發展したのは、第十八世紀に於ける興味ある一の出來事である。たゞ併かしペスタロッチーが直觀と概念との對立を破却して、凡てを內的自我の自己構成と見たところには、リードマンも言つてをるやうに、カントよりは寧ろ「フィヒテの理想主義に接近した」とさへ解すべき節がないでもない。蓋しカントにありて、その直觀はさきにも述べたやうに、著しく受働的であつて、自己生産的なのは、獨り純粹思惟のみであると言つてもよい。然るにペスタロッチーにありてはその直觀が既に精神の全本源性と「獨立性」を懷いてをる。此點に於てフィヒテの哲學が凡て純粹自我に發足するのに擬するものも、必ずしも附會とのみは言ふを得まい。フィヒテにありて、凡ての知識は自己自身による知識であり、凡ての認識は自己認識である。「理性的本質が自ら招來するを得ると信せざるもの、若しくはその招來を自らに歸するを得ぬものは、何物も理性的本質の知覺のうちには現はれない」とはフィヒテの言葉である。之に對してペスタロッチーは言ふ。「凡ての汝の直觀の此中心點即ち汝自身が汝自身に取つて直觀の主題である」。ペスタロッチーの此「自身 Selbst」

が身體的の自身と解すべきでないのは言ふまでもない。「眞理を知ること、人間にありて、彼自らを知ることに出發する」とペスタロツチーが言ふとき、誰れか此「彼自ら」を彼れの身體と解するものがあらうぞ。蓋し直觀力は彼にありて自我行動 *Selbstthätig* に内在する。前にも述べたやうに、最も單純な直觀と言つても、それは單なる感性の所産ではなく、既に「自己自身の作爲」でなくてはならない。勿論直觀は「感覺機關の前に立つこと *Vor-den-Sinnen-Stehen*」に發足する。けれども自然的な生命存在としては人はその五つの感覺機關の總和に過ぎない。五官を通じて入り來る破片が、人間の中心點即ち人間自身に觸れて發展する限りに於てのみ價值がある。認識がすべて「人間の中心點」即ち「人間自身」に根ざすと見るところにペスタロツチーの理想主義は窺はれる。「余があるところの一切、余が欲するところの一切、及び余がせねばならない一切は、余自から發する。余の認識も亦余自から發してはならないか」。「これは「ゲルトルードは如何にして其子を教ゆるか」のうちに、彼れが認識に於ける理想主義を自ら高唱したものと、しての有名な言葉である。「隱者の夕暮」のうちに「純粹に我々の本質の最内部から創造された眞理」^(三)と言つてをるのも同じ意を表はすものと見てよいであらう。

けれどもペスタロッチーの直觀がその基礎を内面的自我に有つことを明かにするには、直觀の原理と自己活動の原理との關係を一瞥する必要がある。ペスタロッチーの直觀は自己活動から來る自からなる歸結と言つてもよい。自己活動とは何か。ペスタロッチーの説くところに從へば、自己活動とは、人間の最後の永劫の自我が主宰するといふこと、言換れば凡そ死滅的なものが永劫の自我に從てその方向を定め且つ形成しなくてはならぬといふことである。此永劫の自我こそ自己創造著しくは自己永久化の主體である。外的なもの死滅的なものは彼れには内的なもの、不滅的なものゝ記號であり表はれである。故に内的なものが先づ第一に純粹でなくてはならぬといふのが、ペスタロッチーの念じたところである。ペスタロッチーの自己活動の原理とは、彼れが永劫性の創造者 *Schöpfer seiner Ewigkeit* としての人間そのものをして、意識を發展させ、意識をすべて「彼自らの作爲 *Werk seiner Selbst*」たらしめようとするものである。ピタゴラスの古い言葉にもあるやうに、我々はたゞ彼があるところのものになり、さうしてたゞその素質に從て、たゞ自己自身から、自己自身を通してあるといふことに依てのみ、人間となることが出来る。プラトンにせよ、エクラトにせよ、ライプニッツにせよ、ゲーテにせよ、シルラアにせよ、凡て偉大な理想主義

者の説くところである。さうしてカントはそれを「自發性 Spontaneität」²⁾「自由 Freiheit」³⁾を以て理論的に發展し、ファイヒテはそれの完全な内的統一を主張した。ファイヒテが ペスタロッチをカントに比したのも亦茲から來る。千八百八十八年 ペスタロッチの教育小説「リーンハルトとゲルトルード」を讀んで感激し、終夜眠らなかつたと傳へられる ファイヒテが、一千七百九十三年の初冬 チューリヒ湖畔の リヒタアスウイールの佗住居に ペスタロッチを訪れ、數日間の滞在在中、彼は「カント哲學の根本を顧みつゝ、『リーンハルトとゲルトルード』を吟味して、『ペスタロッチの經驗の道行が、カント哲學の結果に本質上」ペスタロッチを「接近せしめたことを」ペスタロッチに告げたのである。けれど我々は ファイヒテの斯かる觀察に依ては、事柄の性質に依て、若しくは ペスタロッチ自らの例の必ずしも明瞭でない言葉に依て、此ことを解し得るのである。要するに ペスタロッチの自己活動の原理は内面的自己生産を強調する原理であつて、此の原理からして直觀が必然される。斯くして ペスタロッチの直觀は、人間を自然の單なる傍觀者若しくは通譯と見るところに出發する單なる受働的な感性的なものではなくて、ペスタロッチの直觀の眞意を解し得たと言はれる彼の カールリッタアが述べてゐるやうに、「兒童のうちなる動的理

念に依り、^(三)内的必然性に從て「規定されたものであり、手短かに言へば、自己生産されたものである」。^(三)ナトルプがペスタロッチーの直観は「完全なる内面化 volle Verinnerlichung」を意味する」と言つたのも至當である。

六

直観に於ける内的自我の作用又は價値を説くものとして、我々は更らに「方法 Die Method」のうちに表はれたペスタロッチーの思想を見逃がしてはならない。此著作はニーデラアも言つてをるやうに、ペスタロッチーが「スタンツからブルグドルに來た頃、教育上の彼れが努力を助ける爲に組織された一協會に與へたペスタロッチーの報告」である。「余が今日の行動とさうして國民教育の余の意見に就ての最初の發表 Erste öffentliche Aeusserung über mein jetziges Thun und meine Ansicht der Volksbildung」といふ此著の又の名や、「諸君よ！これはその研究と自由批評とを私が乞ふところの原理と方法との短かき綱領である」^(四)と、自ら洩らす此書の結語に依ても明かるやうに、此著作は教育の原理と方法とに關するペスタロッチーの序曲とも言ふべきものであつて、此報告を發表した翌年即ち一千八百一年に出たのが主著「ゲルトルードは如何にして其子を教ゆるか」である。さうして我々は凡そ序曲といふものがさうである

やうに、此序曲に於ても後に來るであらうところの一切を極めて端的に又極めて適切に捕へることが出来る。「方法」と「ゲルトロッド」は如何にして其子を教ゆるか」を併せ讀むものは、恐らくこのことの眞なる疑はないであらう。實際、ゲルトロッドは如何にして其子を教ゆるか」に於て、或は臆ろであり、或は多義的でもあるものが、「方法」に於ては、手短かではあるが——、手短かであればこそ、却てペスタロッチの意とするところが鮮かに窺はれる。少なくとも直觀の概念、詳しく言へば我々が當面の問題としてをるところの、直觀に於ける内的自我の作用若しくは價値に就ての彼の見解に於て、さう言ふことを私は憚らない。其書の始めに於て「歐羅巴の人民を衰弱させる學校の害惡をたゞ糊塗するだけではなく、その根源を癒さうとする衝動」が我が心のうちに起つて來たと言つて、何時ものやうに、教育に依て世を救はうとする彼れが使命を自ら顧みたペスタロッチは、たゞこのことたるや、感性的な直觀から明瞭な概念へと人の心が向上する永劫の理法に、凡ての教授の形式を従はせることなしには本質上あり得ない」と言つて認識の陶冶に於ける彼の立場を早くも豫示してをる。直觀は「人間の認識の唯一つの基礎であるから、人間の教授の本來の眞實の基礎」であり、これこそ余が出發する本質的の立場であると言つて、直觀の道行を説き

進め、さうして彼は言ふのである。「若し私が人間の術の凡ての此等の要素の普遍的根源を辿つて見ると、私はそれを我々の精神の普遍的基礎のうちに見出す、その基礎に依て、我々の悟性は感性が自然から受け取つた印象をば統一體として、即ち概念としてその表象のうちに捕へる⁽⁵⁾」。精神の普遍的基礎を重く見るペスタロッチの心は明かである。進んで教授の凡ての術が據るべき重要な法則を説く間にも、凡ての非本質的なものをば本質的なものに結合せよ⁽⁶⁾と警告し、更らに直観に於ける自然の法則を種々に説き、漸く直観に就ての彼れが独自の立場を述べて、次のやうに言つてをる。『けれど汝が自然の此法則も亦その全範圍に於て、第二のものを回轉する。此法則は汝が全實在の中心點を回轉する。さうして此中心點は汝自身である』⁽⁷⁾。直観が自然の法則に従はなくてはならないとしても、其自然の法則が人間的實在の中心點即ち汝自身を回轉するとしたならば、直観は内的自我に統一されるものでなくてはならない。「人は萬物の尺度である」といふ古き教を、獨り道德に於てばかりでなく、認識に於ても、堅く守るがペスタロッチである。道德が「自己自身の作爲」であるやうに、直観に依る眞理も、自己自身の作爲である。凡ての陶冶の中心點としての汝自身の價値を直観に於ても強調して彼は更らに言ふ。「人間よ、それを忘れるな！汝

があるところの一切、汝が意志するところの一切、汝がねばならないところの一切は、汝自身から發足する。すべて汝の自然的直観には一個の中心點がなくてはならない。さうして是が亦汝自身である。^(註)

自然的直観がすべて汝自身を中心點としなくてはならないと言ふペスタロッチの此の強き主張に依て、彼の直観がカントのそれと趣を異にすることは、多くの説明を要せぬであらう。「概念なき直観は盲目なり」と言ふ言葉に早や明かなやうに、カントは直観と概念とを二元的に對立し、一つは受働的な盲目的なもの、他は自發的にして自ら見得る力であるとした。蓋しカントに従へば、認識の構成に於ては、先づ對象が與へられ、我々の心はこの對象に感觸 *affizieren* されなくてはならない。此感觸する心の作用を感性と言ひ、その作用の結果を直観と言ふ。さうして斯かる直観などに就て思惟するは悟性の作用であるが、この思惟に依て生ずるものが概念である。故にカントは直観を以て受納性 *Rezeptivität*、思惟を以て自發性 *Spontaneität* とした。然るにペスタロッチは斯かる二元的な對立を破却して、直観にも自發性を認め、汝自身即ち自我そのものを以て直観構成の根本原理とした。ペスタロッチは「方法」のうち、言葉を換へて更らに同じ意を述べてをる。「世界の對象物が余の感覺機關か

ら遠ざけられれば、それだけ余に取つて虚妄と誤謬の源となり、又それだけ罪惡の源ともなるといふことは、動かすことの出来ないところである。けれど余は繰返す、自然的機制の此法則も亦より高きものを回轉する。それは汝が全實在の中心點を回轉する。さうして是が汝自身である^(E)。

自然的機制の法則も「汝自身」即自我を中心として回轉すべきであるとするペスタロッチーは、その必然の歸結として、「自己認識 *Selbsterkenntnis*」を重視し、「自己認識はかくして全人間教授の本質がそこから發しなくてはならない中心點である。」^(E)と言ふ。「然るに此自己認識はそれの本質に於て二重的である」^(E)「其一は余が自然的本性の知識であつて、ペスタロッチーは「人間教授の基礎としてこれを利用しようとして大いに努めたのである。其二は余が内的獨立の知識であり、余自身の幸福を増さうとする余が意志の意識と、さうして余が見るところに忠實ならうとする余が義務である^(E)」。惟ふにデカルトルの「我思ふ *Cogito*」が教えるやうに、如何なるものも意識されると同時に我がものとして意識されなくてはならない。「我思ふ」は我々の意識のすべてを包むと言つてもよい。然るに凡そ自己意識は感性の生ずるを難しとするところである。自己意識は實に全く自發性の行動 *Actus der Spontaneität* でなくてはならな

い。自發性とは、併かし、内部の自我の必然的發動性以外の何物でもない。斯く考へて眞の自我に就ての知識に達することを教育の究局課題としたペスタロッチーが、直觀を以て「汝自身」即ち自我を中心とする自己認識としたのは飽迄も正しい。

七

直觀を以て受働的な單なる感性とせず、寧ろ上に述べたやうに自我に依て内的に統一されたものとするペスタロッチーにあつて、直觀はまた内外兩界を融合渾化せる具體的な人格的體驗ともなつて來る。蓋し「感覺機關の前に立つもの」としての直觀は、全直觀ではなくて、前にも述べたやうに外的直觀 äussere Anschauung である。ペスタロッチーの直觀は斯様な單なる外的直觀ではなくて、外的對象世界の内面化としての體驗である。直觀は我に與へられたものではなくて、我の「本性 Natur」から射出する理念 Idee をそのうちに自己形成するものである。「スタンツの手紙 Ueber den Aufenthalt in Stans」のうちには、それゆゑ直觀の對象に於て余は余の理念を感性化することが出来ると言つてをる。その意とするところは、直觀を以て單なる感性的なものと見ず、感性化せる理念の具體相と見るにある。リードマンがペスタロッチーの直觀を解して「個々に依る普遍 das Allgemeine durch Einzelnes」としたのも飽く迄も正しい。直

觀は外部的の仲介物に依る内面的の人間の體驗である。直觀は感覺機關に依て與へられる單なる受納ではなくて、創造的な活動である。故にペスタロッチーは「ゲルトルードは如何にして其子を教ゆるか」の第四信の中に、「各の線、各の量、各の語は、悟性が熟せる直觀から出產した結果である」とも言つてをる。本來内にはないものは、遂に精神過程に現はれないとは、ペスタロッチーが平生信じて疑はなかつたところである。人間の陶冶はすべて此の内なるものに發足しなくてはならない。此内なるものが、一種特異な仕方を以て、我々に於て、外なるものと相遭遇した具體的の體驗、それがペスタロッチーの直觀である。かくて直觀はさきにも述べたやうに、感覺と精神との二重的な或物である。直觀は感覺的である。けれど單なる感覺的ではない。直觀の感覺的と、さうして直觀の單なる感覺的との區別こそ根本的重に要である。直觀たるからには、それは感覺的であり、最後まで感覺的でなくてはならない。たゞ單なる感覺的 *bloss sinnlich* は斷じて直觀たる所以でない。出發點に於ける單なる感覺的を除くは自然の能くするところであるとは、ペスタロッチーの公言するところ。直觀が飽迄も感覺的であつて、而かも單なる感覺的でないといふのは、ペスタロッチーが斷えず力説する人間の二重性 *Doppelnatur* 即ち、「感覺精神的」から來る必然的の歸結以

外の何物でもない。ナトルプがペスタロツチの直観を解して、一面感性に向ひつ、他面無限遠の標的に向ふ中間物たる我々人類の體驗としての具體的關聯 *konkreten Zusammenhang* としたのも面白い。

單なる感覺が盲目であり、見得るものは獨り精神そのものでなくてはならないならば、直觀の力は本來精神の力でなくてはならない。けれどそれは事物のうちには、さうして事物を通して働らく具體的の精神の力である。動物的の衝動なしには道德性もあり得ないとしたペスタロツチは、同時に感性なしには認識なしとした。蓋し精神は感性に依て自己を解放するの外はない。感性を精神を解放する。たゞその刹那に於て、感性は精神に差押へられて、直觀に化するのである。故にペスタロツチの直觀は、ナトルプも言ふやうに、精神的なものが最後の感性的なものにまで行き渡り、精神の法則が感性的なものに滲潤し、所謂自己創造の見地の下にこれを統一し、斯くして生ずる具體的な充實體である。直觀に於て感性と精神とは不分離的な具體的渾一體となる。ペスタロツチの直觀は、故に又人間の全體性を以てその本質とするとも言ふことが出来る。

八

以上説くところに依て、我々はペスタロツチが直観論の大體を素描した。カントと共に、恰も彼の遍した經驗論と頑固な合理論とを調停和解すべきであつたかのやうな時代に生涯したペスタロツチは、彼が教育思想の特色を最もよく表はすものと言つてもよいその直観論に於て、感性と精神との限界を除くべくその最善を盡した観がある。思想の全體系に於て飽く迄も精神そのものゝ上位を認めつゝ、その直観に於て彼は感性と精神との抽象的な限界を除かうとした。感性と精神との間にはたゞ相關關係がなくてはならない。この相關々係に於てのみ感性と精神とを見ようと努めたペスタロツチは、同時に直観と思惟との單なる二元的對立をも破却しようとした。直観に於ては、ナトルブも言ふやうに、純粹思惟の機能は紛糾解き難き姿を呈して働らくのであるが、併かし、直観に依て純粹思惟はたゞ具體的になる。ペスタロツチの直観は既に見たやうに、具體化された純粹思惟の外の何物でもない。言ひ換れば、概念としての概念は、直観から取り出されるが、併し、直観のうちにも概念は全生命を有つてをる。^(三)概念は直観のうちにあるが、併し、直観から概念を生じて來ると彼は言ふ。斯くてペスタロツチにありては、直観と思惟とを二元的に對立させ、且つその思惟の前に直観を置かうとするが如きカントの風情は一洗された。

惟ふに苟くも思惟にして存在思惟ならざる何物もなく、逆に又苟くも存在にして思惟存在ならざる何物もないであらう。思惟と存在との間には、不斷の相關々係がなくはならない。存在とは思惟の存在であり、思惟とは存在の思惟である。故に存在なくんば思惟なく、逆に思惟なくんば存在はない。存在と思惟との關係にあつては、一つがあるといふのも、實は互に他に對する關係に於てあるといふに過ぎない。我々はこのことをペスタロツチの直觀論に明かに讀むのである。彼はその直觀論に於て、存在と思惟の單なる對立を脱して、兩者に同權をさへ賦與する概を示したではないか。彼はその直觀論に於て、思惟をして獨裁君主として存在の上に臨ませようとする態度もなく、逆に又存在をして獨裁君主として思惟の上に臨ませようとする風情もない。思惟は直接に存在思惟であり、存在は直接に思惟存在であるからである。遍した經驗論と頑固な合理論とは、斯くして「理念の感性化」としての、同時に「感性の理念化」としてのペスタロツチが直觀の論に於て、一元的に統一されたと言つてもよいであらう。

參考文獻

- (一) P. Natourp, Herbart, Pestalozzi und die heutigen Aufgaben der Erziehungslchre, Gesammelte Abhandlungen zur Sozialpädagogik 1907, S. 297
- (二) J. II. Pestalozzi, wie Gertrud ihre Kinder lehrt, Pestalozzis sämtliche Werke herausgegeben von Seyffarth, Neunter Band S. 117
- (三) J. H. Pestalozzi, Ansichten und Erfahrungen, die Idee der Elementarbildung betreffend, Pestalozzis Ausgewählte Werke herausgegeben von K. Mann Driller Band S. 319
- (四) J. II. Pestalozzi, Die Methode, Pestalozzis sämtliche Werke herausgegeben von Seyffarth, Achter Band, S. 428
- (五) J. II. Pestalozzi, Wie Gertrud ihre Kinder lehrt, Pestalozzis sämtliche Werke herausgegeben von Seyffarth Neunter Band S. 120
- (六) A. Buchmann, Pestalozzis Sozialphilosophie 1919, S. 174
- (七) J. II. Pestalozzi, Wie Gertrud ihre Kinder lehrt, Pestalozzis sämtliche Werke herausgegeben von Seyffarth Neunter Band S. 121
- (八) „ „ S. 121
- (九) „ „ S. 122
- (十) „ „ S. 122
- (十一) „ „ S. 126
- (十二) „ „ S. 132
- (十三) „ „ S. 117

- (四) ” S. 134
- (五) ” S. 134
- (六) ” S. 134
- (七) ” S. 134
- (八) ” S. 134
- (九) ” S. 134
- (十) Max Riechmann, Pestalozzi Ein Führer 1924 S. 39
- (十一) J. II. Pestalozzi, Abendstunde eines Einsiedlers, Pestalozzis sämtliche Werke Herausgegeben von Seyffardt Dritter Band S. 317
- (十二) Morf, zur Biographie Pestalozzis, 4 Teil 1889, S. 37
- (十三) P. Natorp, Der Idealismus Pestalozzis Eine Neuntersuchung der Philosophischen Grundlagen seiner Erziehungslehre 1919 S. 123
- (十四) J. II. Pestalozzi, Die Methode, Pestalozzis sämtliche Werke Herausgegeben von Seyffardt, Achter Band S. 440
- (十五) ” S. 427
- (十六) ” S. 428
- (十七) ” S. 429
- (十八) ” S. 430
- (十九) ” S. 430
- (二十) ” S. 430
- (二十一) ” S. 430
- (二十二) ” S. 438

- (註) 〃 S. 438
 (註) 〃 S. 438

(註) J. H. Pestalozzi, Ueber den Aufenthalt in Stans, Pestalozzis sämtliche Werke Herausgegeben von Seyffarth Achter Band
 S. 402

- (註) Max Riedmann, Pestalozzis Ein Führer 1924 S. 30
 (註) P. Natorp, Der Idealismus Pestalozzis, 1919 S. 125
 (註) P. Natorp, Die Logischen Grundlagen der Exakten Wissenschaften 1921 S. 264
 (註) P. Natorp, Der Idealismus Pestalozzis 1919 S. 132